

国際開発学部の開設や文京キャンパスの再開発など「新拓殖学」を模索――

# 「日本の平均的な若者の集う大学のモデルとなりたい」

大学の全入時代を迎えるといわれる二〇〇六年。産業界だけでなく、

大学でも改革が求められる時代になった。そのなかで、拓殖大学の渡辺利夫学長は「社会に通用する人間を育むには、公の精神が大事」と大学改革の要諦を語った――。

## 公の精神が劣ってきた

——現在の産業界では、ラブドア事件など「公の心」「公の意識」が希薄化している

が、いま、立て続けに起つて

います。これは、私には偶發的で一過性のものには、どうして

も思えません。やはり、戦後教育のシンボリックな產物に見えます。

戦後教育は私的利得、私的欲

が滅びたという原体験への一つの反動だ、という側面は確かに

あるでしょうね。

しかし、その反動が六十年余りも続いたというのは、いかにも異常です。その成れの果てが、

ホリエモンであり、姉歯建築士

のなですが、なんともやりきれ

ませんね。

従うことが大事だという考え方

が、いまは非常に薄くなっています。

なるほど。これが資本主義、自由経済であるならば何

をしていい、という考えに繋

がったのかもしれませんね。

―― あります（笑）。誰にでもあるのです。しかし、マスク

の報道をみていると、この両

や幹部の逮捕、またマンションの耐震強度偽装事件などの問題

—— これは戦前教育の反動ではないでしょうか。

渡辺 そうですね。やはり、

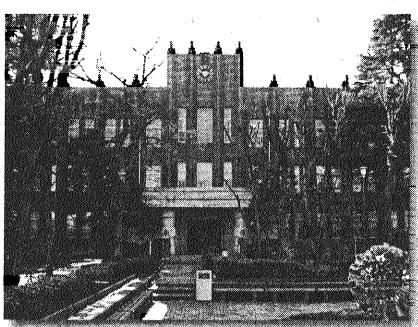
社会行動にはすべて倫理がある

ただ、人間には両面性がある

ということを、われわれは認識

する必要があります。言い換えると、私にも「内なるホリエモン」

があります（笑）。誰にでもあるのです。しかし、マスク





拓殖大学学長

渡辺 利夫

わたなべ・としお

1939年山梨県生まれ。70年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。85年筑波大学教授、87年東京工業大学教授、2000年拓殖大学国際開発学部教授を経て、05年4月拓殖大学学長就任。

人生というの  
は、毎日些細な  
ことの繰り返し  
ですから、その  
些細なこと一つ  
ひとつの中に、  
公という意識を  
少しずつ取り入

ここに住む人間は「蕃」と言われ、人間ではないとみなされていました。だからこそ、日清戦争で負けた清国は、台湾を日本に譲渡したのです。

つまり、自分  
のためではな  
く、他人のため  
に、ちょっとで  
も良いことをす  
るというのが、  
自分の晴れがま  
しさや誇りにつ  
ながる。その幸  
せな感覚が公に  
生きるというこ  
との原点なので  
すよ。

分かりやすいお話をですね。拓殖大学の創立の趣旨にも、公の精神というのがあったのですか。

**渡辺** これは時代が変わつても、全く変わつてはならないものだと思います。しかし、拓大のそうした伝統は、戦後になつて磨滅してきたような気がします。

台湾は日本初の海外領土で、「化外の地」でした。「化外の地」とは中華文明の中心部から遠く隔てられた場所のことです。そ

面性を無視して、一時はホリエモンを時代の寵児のように取り上げ、今度は徹底的に叩くだけです。こういうやり方では人間は成熟できませんよね。

渡辺 私がよく学生に言うのは、電車で座つていて、目の前におじいちゃん、おばあちゃんが来たとき、「どうぞ」と席を譲つてあげたとしたら、その日りかけていますか。

は「なんか良いことしたな」という小さな幸せが心に宿るでしょう。しかし、自分が疲れていて、狸寝入りをして席を譲らなかつたら、悔いのような感情が一日中残るだろうというんです。

**平均的な若者の大学が  
伸びるモデル像を創る**

くような生き方にしてはないと、学生にはつねに言っています。

備して、台湾の近代化に嘗々と建設のエネルギーを注ぎ込んできました。台湾の開発と近代化に高い志をもつてあたる人間を養成する学校として拓大、当時の台湾協会学校が建学されたのです。

——それが一九〇〇年のことですね。

**渡辺** はい。台湾へ派遣された当時の青年たちの士気は高く、充実した人生を送っていたのです。このように未開の地域の開発と近代化に人生の意義を見出した先輩達の精神が拓大には引き継がれているわけです。私はこの精神をもう一度発掘したいと考えています。

——発掘して現代風に編集し直すと。

**渡辺** そうです。ですから、

私は「新拓殖学」というべきものを作り、それを発信したいと考えています。これから厳しい大学競争の時代の中で、拓大が一步先に出るには何が必要かを常に考えているのですが、百年以上の伝統や建学の精神を新たに解釈

し、編集し直して「新拓殖学」を創成し、これをもつて教育や研究システムを立て直さなくてはなりません。

これからさらに百

年、拓大が生き延び、社会に貢献していくのであれば、そういうことを本格的にやらなくてはなりません。

——なるほど。

いまは二〇〇七年に

来ると言われていた受験生の大學生入時代が一年前倒しになつて、〇六年から始まるわけですね。そういう時代において、拓殖大学はどんな大学を目指していきますか。

**渡辺** 拓殖大学の学生というのは、日本の若者の平均像なんですね。平均的ということは、その数が日本で一番多いということですから、そこが変わらないと日本が変わりません。

東大や京大も、もともとが工

リート大学で、少數の人たちしかいません。そこだけが変わつても日本は変わりません。平均的な若者の知的水準を上げなければ日本は変わらない、と思うのです。

## 教育とは 引き出すこと

——では、具体的な取り組みとして、渡辺さんはどんなことを考えていますか。

**渡辺** たとえば、二〇〇〇年に国際開発学部が生まれました。ここでは希望する学生を短期研修でマレーシアやフィリピン、インドネシア、中国、韓国、台湾などに出して、ホームステイをさせる制度を作りました。



たとえば、フィリピン・マニラの郊外には“スマーキーマウンテン”と呼ばれる東京の夢の島のような、ゴミ山の地域があるのですが、大量のゴミからガスが出て、これに火がついて、いつも煙った状態になっている場所があります。その周辺には、非常に貧しい人たちが沢山住んでいます。そういうところへ彼らを連れ出します。

—— あえて、そういう場所を選ぶのですね。

**渡辺** 周辺に住む子供たちは少しでも金目のものを拾つてきて、アルミ缶やビニール袋を再生素してロープにしたりして売つて生活しているわけです。

その子供たちを集めて、子供会のようなグループを作つて、そのグループをいくつか集めてコミュニケーションのリーダーを育成する。そんなNGOの人がいるのですが、たとえ一週間であつてもこういうところへ学生を送り込むと、彼らはひと皮もふた皮もむけて、こちらが驚くほどいい顔をして帰ってきます。公

の精神に、そういう行動を通じて目覚めるんですね。

今の日本では、あまりにも豊かな生活の中で、他人のために何かをするという機会が少なくなっているんです。開発途上国にいかせて、そのようなチャンスをもっと与えるべきだと思います。

—— ということは、可能性を引き出してやることが大学の使命になりますね。

—— はい。いま、引き出すとおっしゃいましたが、全くそのとおりです。エデュケートという意味は、本来「教える」ではなく、「引き出す」です。

教室で基本的なことは教えないことはいうまで、そこまで教えないことは教えないことはいうまで、それは結構忘れられている視点なのですが、大学が大衆化したということは、大学教員も大衆化しているということです。それなのに、大衆化した教員がプロフェッサーの穴にはまり込んで、教育者としての機能を失つてしまっている例が少なくないことが残念です。

—— ここにズレがあるわけですね。

—— プロフェッサーは土日ドティーチャーに徹してくれとやつてほしい。大学ではグッ

教授会などで私はつねに言っています。しかも、私どもの大学では、教員の定年を七十歳から六十七歳に変更しました。辞め

教授が一体となつての協力が必要ですね。そのために、渡辺さんはどんな言葉で語りかけていますか。

渡辺 先程も言いましたが、

拓大的な学生は日本の平均的な若者です。ですから、われわれ教員側もプロフェッサーである前に、グッドティーチャーでなければなりません。

これは結構忘れられている視点なのですが、大学が大衆化したということは、大学教員も大衆化しているということです。

渡辺 私の四十年の教員としての経験から言うと、大学生活で、最も重要なのが一年生の前期です。ここで、学生をつかみ損ねたら、その学生は四年間をまつとうすることは難しい。そこで学生の心をうまくつかまえたら、四年間うまくいく可能性が高まります。

## 大学生生活は決まる

—— これは自身の経験から感じたことなのですか。

していく人もこれからは増えてきますので、そこに若くてティーチャーとしての能力が高い人々を補いたいと考えています。

そして、「教育が自分の人生にいかせて、そのようなチャンスをもっと与えるべきだと思いませんか。」「教育に自分の人生を懸けてみよう」という心構えを持つた教員を育んでいけば、数年で拓大も変わること思います。

拓大的な学生は日本の平均的な若者です。ですから、われわれ教員側もプロフェッサーである前に、グッドティーチャーでなければなりません。

これは結構忘れられている視点なのですが、大学が大衆化したということは、大学教員も大衆化しているということです。それなのに、大衆化した教員がプロフェッサーの穴にはまり込んで、教育者としての機能を失つてしまっている例が少なくないことが残念です。

—— ここにズレがあるわけですね。

—— プロフェッサーは土日ドティーチャーに徹してくれとやつてほしい。大学ではグッ教授会などで私はつねに言っています。しかも、私どもの大学では、教員の定年を七十歳から六十七歳に変更しました。辞め

費やしてくださいと。後の二、三、四年は後の五〇でいいよと

いうわけです。

これは極端な言い方ですが、学生もある程度までいくと、勉強することは辛いけどマスターすると楽しいな、と感じるようになります。

—— それから、八王子と文京でキャンパスを二つ持つことの意味をどう考えていらっしゃるですか。

渡辺 都心回帰の傾向はとめどなしという感じです。八王子は学生にとって、魅力のあると

ころではないといふことも分かってきました。

かつての、十八歳人口が増えつづけた時代には、学生の収容人数の関係で、各大学とも郊外へキャンパスを造ったわけですが、今は学生数が減ってきて、都心回帰の傾向が強まってきた

した。

—— 今年から文京キャンパスの再開発が始まりますが、そういった背景もあるのでしょうか。

渡辺 ええ。これは何が何でもやらなければならない事業で

## 大学をどう改革するか 拓殖大学

特集

す。ただ、残念なのは、文京キャンパスは宅地のど真ん中にありますので、容積率がそれほど上がらないことです。高い建築物は難しいのです。それでもアジア

塾や日本文化講座など夜間の事業展開を積極的に広げて、稼働率をアップさせ、文京キャンパスをフルに活用させていこう、と考えています。

—— 最後に、渡辺さん自身の目標はありますか。

渡辺 やはり、もっと拓大といいう学校を外に発信していく必

要があります。学長は拓大の知の発信者でなければなりません。その意味で私は、拓大の顔になろうと決意しています。

拓大というと渡辺という学長がいて、何をやっている人間で、何を考え、どういう発信をしているかが、すぐに分かるようなイメージを作りたいのです。

ヤンkeesは宅地のど真ん中にあります。その意味で私は、拓大の顔になろうと決意しています。拓大といいう学長がいて、何をやっている人間で、何を考え、どういう発信をしているかが、すぐに分かるようなイメージを作りたいのです。

—— 何をやっている人間で、何を考え、どういう発信をしているかが、すぐに分かるようなイメージを作りたいのです。

(聞き手 本誌主幹・村田 博文)

# 拓大の精神は校歌にあり



拓殖大学第一高等学校校長  
河田 昌一郎 かわた・しょういちろう

拓大一高は高大一貫教育に取り組んでいます。しかし、高校と大学の教育となると、その内容や教育方法は全く異なります。大学生といふのは、世間からも大人といふ扱いを受けますが、高校生は発達途上のまだ子供なんですね。です

## 大学改革の展望

### 地方行政研究科などユニークな教育に加え 高大一貫教育で新機軸

歴史と伝統のある拓殖大学が大きく変わろうとしている。

拓殖大学の創立は一九〇〇年と古く、台湾開発に貢献する人材の育成を目標に台湾協会学校として誕生した。そのため、外国人留学生は二〇〇五年五月時点で九百六

十五人と、学生二万四百七人のうち一割近くを占めるほど多い。

そのなかで、拓殖大学の歴史の転換点となつたのが、創立百周年を迎えた二〇〇〇年。この年から「建学の原点回帰」をキャッチフレーズに、国際開発学部を設立する

から、私は高校が人格形成をする最後の時期だと思います。

そこで大事になつてくるのが、拓大の精神をしつかり教えていくこと。拓大の精神というのは校歌に表れていると思いますので、きつちり校歌の意味を教えていくことが必要だと考えています。

具体的に言うと、校歌に「人種の色と地の境 我がたつ前に差別なし」という一節があります。私はこれを「人間は誰しも自分が一番かわいいと思うものだが、人種や出生が違つても、お互に相手のことを認め理解しあつて共存していく」と解釈しています。

また、「膏雨ひとしく湿さば  
確やがて花咲かむ」というのは、  
「たとえ荒地であつても一滴一滴の  
水が、緑豊かな大地に変えていく  
んだ」という不斷の努力ということを教えてくれるのです。

また、本校は二〇〇四年に東京・小金井から現在の東京・武蔵村山に移転してきました。いまは計画中の段階ですが、最寄り駅である玉川上水駅周辺の都立上水高

校、東大和南高校、東大和高校と本校の四校と協力して、ここに学校があるというのは、地域に生きるということですから、地域の皆様の力になれるように何かできなさいものか、と考えて玉川上水を学園都市にしようというプロジェクトを進めています。

玉川上水というと、太宰治が入

水したということで知られていますが、あれは三鷹の方です。玉川上水駅というのにはあまり有名ではありませんので、みんなで力を合わせて学園都市などと主張していこう、と考えたのです。

いまではおかげさまで、隣町の学校からも、一緒にやろうという問い合わせが来ております。

生徒を募集する立場にとつて、進学実績は大事だと思いますが、それよりも、高校というのは予備校ではない、人生の大好きな三年間を人格形成に費やすときです。とにかく、いまは生徒にも親御さんも、地域の皆様にも満足度の高い

学校にしたいと考え、努力したいと思つております。

など、全学あげて進めてきた改革

するうえで、高校が最後の教育の全体像が浮き彫りとなつてきた。

改革の第一歩として、〇五年四月に学長に就任した渡辺利夫氏は、「時代が変わつていて、学科だけではなく、学部間の整理を始めた。

単位互換制度の導入で、人間的な深みのある人材を輩出しようと

している。互換制度を活用するこ

とによって、政経学部の学生が工

学部の授業を選択することも可能

になり、授業が重なることから教員数の確保も小人数ですむ。

そして、拓殖大学は〇七年度に、

「地方行政研究科」を政経学部に発

足させる予定だ。渡辺氏はその狙

いを「三位一体改革」という流れが

出て、いまは実力のない地方自治

体は落ちていく時代になりました。

やはり、地方行政に対するニーズ

が高まつていてことから、発足する

ことにしたのです」と話している。

また、拓殖大学第一高等学校校

長の河田昌一郎氏が「人格形成を

場だと思うのです。良い大学に入るためにだけでは予備校と変わらないので、高校生活三年間という日を大切に生きてもらいたい」と話すように、「高大一貫教育」も拓大

高は、校舎のある東京・武蔵村山市

の玉川上水駅近隣の高校や大学

などと連携して、新たな学園都市を創る計画もある。

このように一連の改革には、社会への貢献という建学以来の精神が受け継がれている。今後もこの精神を継承することができるのなら、この特長を生かして質の高い人材を輩出するのだろう。

(本誌 松村聰一郎)

